

マイクロ環境

1. ムカシヤンマとアリジゴク

ムカシヤンマは、同じく「昔」がつくムカシトンボ同様、原始的な形態をもつトンボです。打吹山では相撲場の上、長谷寺の下、みどり町へ続く林道で、5月に成虫が見られます。アカネなどのように枝などの先端に止まるのではなく、樹幹や地面の平坦面に止まります。もう一つ変わっている点は、幼虫のヤゴが水中ではなく、水の滴る崖地のジャゴケなどの下にトンネルを掘って住み、水中生活ではないことです。このような場所では餌が十分



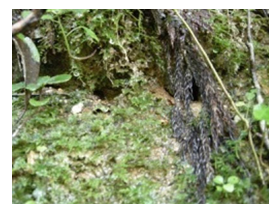
ムカシヤンマ成虫



アリジゴク

でないとみえ、成虫になるまで3年かかるといわれています。成虫が見られる場所は、幼虫の生息地と関係があるのです。

カワトンボのように翅を閉じて止まり、一見トンボの仲間に見えるウスバカゲロウ(No.79参照)の幼虫の巣をアリジゴクと呼んでいます。漏斗状の砂の窪みは、アリが這い上がれないためには乾燥している必要があります。スダジイの大木の根元のような幹が覆って雨が直接かからない場所を探すと大小様々なアリジゴクが見つかります。幼虫は餌の必要量を得るまで1年以上でも待つため、大きさに差があるのです。



幼虫の住む環境

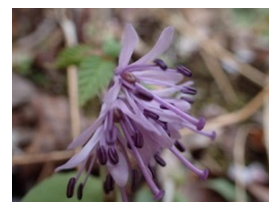


ウスバカゲロウ幼虫

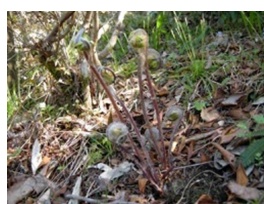
同じ打吹山の中でも水の多い場所、乾燥した場所と異なる条件下で競合することなく生きている昆虫たちです。

2. ショウジョウバカマとゼンマイ

ショウジョウバカマは開花する4月上旬には存在感がありますが、その後は目立たなくなってしまう。根生葉が他の植物に覆われてしまうからです。今のうちに生育地の環境を確認しておきましょう。やや湿った場所を好むシュロソウ科の草本で低地から高山まで生育しているのですが、打吹山では中腹より上では見られません。上部が乾燥していることを示しています。



ショウジョウバカマの花



ゼンマイの若芽

ゼンマイは山菜としてよく利用されるシダです。溪流など水分の多い場所で大きな株となっていますが、遊歩道沿いでは細くて食用に適しません。胞子をたくさん飛ばすため遊歩道の法面の土が露出した場所では前葉体がよく見られますが、少し成長したものは場所が限定されています。



ショウジョウバカマの根生葉



ゼンマイの栄養葉

ショウジョウバカマとゼンマイは、水を好むことは同じですがゼンマイの方が広範囲に生育しています。水分の要求に差があってショウジョウバカマの生育地が少ないのでしょうか。常緑のショウジョウバカマは葉が地面についていますから、夏季は背の高いゼンマイの葉に被覆されています。ショウジョウバカマは冬の貯蓄で夏を生き延びているのか、光の当たる隙間に生活しているのか、同じような要求を持つ植物が共存できる理由を観察して見ましょう。

(倉吉博物館専門委員 國本洗紀 2025)